
とあるアミノの筋肉至上

モーディス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるアミノの筋肉至上

【Nコード】

N9955M

【作者名】

モーデイス

【あらすじ】

超能力がはびこる、ある種の異世界：学園都市。

その学園都市の中で、とある信念を持った男が奮起する！

恋も勉強も青春も事件も、ぜんぶ筋肉で解決しちゃうんだから！

「細い奴の方がマッチョより強いなんて幻想を抱いてる奴は、俺がブチ殺す」

新感覚、筋肉至上学園都市物語！

ブローグ

学園都市。

超能力を植え付けられた子供たちが跋扈する、ある種の異世界。

そこでは現の常識は通用せず、常ならざる法則が待ち構えている。科学技術は、もはや魔法と区別が付かないレベルで進化していた。

だがここに、一石を投じる者が1人。

その世界では本当に、現の常識が通用しないのか？

そう考える男が、学園都市の内にいた。

彼の信じる現の常識とは。

すなわち『鍛え上げた筋肉量の多い人間が、筋量の少ない人間に負けるはずが無い』という論理。

「極限まで鍛え上げた人間に、自称細マッチョ如きのモヤシが勝てるわけねえだろ」

異質なまでの、筋肉への信仰心。

「オマエにとって非常に残念な話だが、弾丸は俺の肌を破っただけに過ぎん」

弾丸を受け止めるほどの、完成された肉体。

「オマエがレベル4だとして、それで俺の筋肉を越えられると思ってるのか？」

非常識としか思えない、己の筋肉への絶対的な自信。

「ベクトル操作か。俺の筋肉は、そんなチンケな能力じゃ揺らганぞ」

超能力と筋肉を比べる、想像を絶した思考能力。

「幻想殺しだ？ 細いクセに俺に勝てる気にいる、つまらん幻想を抱いてるオマエをブチ殺す」

幻想殺し殺しを試みる、アクティブな精神。

「戦って白黒付ける前に、プロテインとステロイドの区別を付けろ」

「50kgのダンベルも持ち上げられないで、よくジャッジメントが務まるな」

「オマエの食卓に足りないのは、肉と魚じゃない。プロテインとビ

タミン錠だ」

「レベル0だからなんだ。筋肉さえあれば、大抵の超能力と同じ事が出来る」

「超能力に頼った時点で、オマエの負けは決定していたということだ」

そんなパーソナルリアリティと肉体を兼ね備えた、レベル4の『^パ発イロキネシスト
火能力者』！
『^{ヒート・セル}細胞発火』の銘を受けながら、『^{マッスル・コレクター}筋肉至上』を名乗る少年！

「これは超能力じゃない……俺の筋肉が生み出した炎だ」

果して彼は、己の正しさを証明できるのか！？

プロローグ（後書き）

亀更新ですが、更新されていたら是非見てやってください。

第1話『Only My Protein』

筋肉とは何か？

生物学的に見れば、人体の一部であり、運動を司る繊維質の束であると言える。

脳からの命令を脊椎が受け取り、運動神経に乗せて筋肉を動かす。それによって、人間は手足を動かし、様々な動作を取ることができる。

だが、それは単なる機能の問題だ。

筋肉に対して、それ以上の想いを抱いている者もいるのだ。

筋肉を鍛え上げ、肉体に磨きをかけることに人生をかける者。

単なる人体の一部を、芸術にまで昇華させようとする者。

その身体を以って武器としようと鍛錬に励む者。

筋肉とは、それだけの価値を秘めているのだ。

ただ、この彼に関しては、筋肉に関して並み以上の価値を置いている。

馬鹿げた話だが、この彼は一度も能力開発訓練を受けたことがない。

……いや、そう表現すると語弊がある。

彼は、他の高レベルの生徒が受けて来たような訓練は受けていない。そういう訓練は、レベル1からレベル2になる途中に切り捨てた。

最初は、気まぐれだった。

能力開発訓練の途中の息抜き。

その程度にしか、研究員たちは考えていなかった。

しかし、筋力トレーニングによって、彼の能力は目に見える成長を遂げた。

いつしか、トレーニングの時間に比例して能力が向上しているのに気づいた。

そして、研究員の1人が冗談半分で言ったのだ。

『いっそ、トレーニングだけやらせてみるか?』などと。

いつしか彼の……『麻生 アノウ 武彦 タケヒコ』の能力開発訓練は。

研究員たちの常識を逸し、筋力トレーニングのみとなった。

「いいぞ、麻生！ 気合を入れて、あと3レップだ！」

「っしやあああああー!!」

能力開発の場合は研究施設からパーソナルトレーニングルームに変わり。

専門的な知識を持った研究員は、一流ジムのトレーナーに変わった。そうなるのにさしたる時間がかからなかったということも記載しておく。

今や研究員の役目は、トレーニングの効果を確認することくらいだ。

レベル4の『細胞発火^{ヒート・セル}』でありながら。
そうでありながら『筋肉至上^{マッスル・コレクター}』を自称する少年。

彼の物語は、今、始まったばかりである。

クレープ食べたい。

そんなことを思いを抱いて、男は列に並んでいる。
190cmを超え、筋骨隆々とした体を持つ男が。

どう見ても、その手の雑誌に載っていそうな小麦色の肌をした男が。
今や『レベル5になるのも時間の問題』と言われている男が。
わざわざ、女子校の近い学区にまで出向いて、クレープ屋台を探しているのだ。

そして、女子供と同じように、その列の中にいた。

しかし、この男、^{トレーニングルーム}研究所からいちいち許可を得る必要がある。
週に1回は甘いものが欲しくなり耐えられなくなるのである。

本当なら、節制に節制を重ねなければならぬため、クレープなどは厳禁だ。

だが、彼の能力開発^{トレーニング}を効率よく続けるためには必要でもある。過剰な我慢は、むしろ悪い結果を生み出してしまふ場合があるとの判断。

そういった温情がなければ、クレープなど口にさせてはくれなかったらう。

ようやく彼の目の前に屋台が来た。

屋台の主は一瞬ギョツとするが、すぐに表情を元に戻す。そんな主に、

「チョコバナナクレープのラージを1つ。生クリーム多めで」

などと、男らしい低音ボイスで告げるのだ。

「お待たせしました」

わりあい早くできたクレープは、男の手には小さく見えた。

大きめのサイズなのだが、それ以上に男の体が標準より大きい。クレープが小さく見えるのも道理というものだ。

「こちらのストラップもどうぞ」

「あ、どうも」

『これで最後なんですよ?』などという店員の言葉を添えて。麻生のゴツイ掌に、ゲコ太のストラップがちょこんと乗せられる。麻生には、そのあまり可愛くないマスコットには見覚えがあつた。彼の妹が、何故か鼻屑にしていたマスコットキャラクターである。せつかなので、実家に送っておいでやろう。そんな思いを抱いた時だった。

「あああああ!？」

などと、可愛らしい声で、その声に似つかわしくない悲鳴が。そこから胴体を動かさぬまま、麻生は首だけでグルリと振り返る。柔軟性の高い僧帽筋だからこそできる芸当だ。その様を見て、女の子は『ヒッ!』と、またらしからぬ悲鳴を漏らす。

お小水が漏れなかったのは、彼女の経験のなせる業か。並みの成人男性なら、確実にチビっててもおかしくない光景だったのに。

「どうしたのかな、お嬢さん」

ハチ切れそんな大胸筋に力を込めつつ、麻生は言った。己よりも、頭1つ分以上の身長差があるうか。そういう少女であつた。

顔つきは可愛いすが、年相応なフランクさが滲み出ている。筋肉量は……同年代の少女からすれば、平均かやや勝る程度。

バルクアップ
筋量増加を目指したトレーニングはしていないだろう。

「い、いえ、その」

「このストラップが欲しかったのかな？ それとも……」

ストラップを小指に引っ掛けてたまま、その手でカバンをゴソゴソ探る。

と、大した間もなく、人の頭くらいの大きさの缶が出てきた。
黒色を基調とした、アルミ製と思われる缶だ。

麻生は、それを少女に突きだしながら得意げに言ってみせる。

「この、タンパク質含有率95%越えのプロテインが欲しかったのかな？」

優しい笑みを浮かべて、その両方を差し出す。

欲しい方を手に取れ、という意味合いのつもりだろう。

親切心のアピールか、麻生は出来る限りの笑みを浮かべたつもりだった。

が、すぐに己の不手際に気が付く。

かわいらしい少女の外観から、何故気付かなんだか。

内心で少しばかり自分を責めると、麻生はプロテインの缶をカバンにしまつて。

己の小指に引っ掛けていたストラップを、少女に手渡した。

「あの、えっと」

「残念だが、君にこのプロテインはまだ早い。もっと鍛えてからに
しなさい」

そう、少女にプロテインはまだ早い。

年相応の少女の、中学生程度の少女の細腕から、どうして気付かなか
ったのか。

鍛えこまれていない肉体にとって、プロテインは大した意味を成さ
ない。

むしろ、鍛えこまれた肉体にこそ、効率の良いタンパク質摂取が求
められる。

まだその領域に達していない少女には、無用のものなのだ。

「俺のようになりたかったら、一から地道に鍛え上げなさい。

安易なプロテイン摂取など、体型を崩すだけでいいことは1つも
ない」

そう諭して、満足げにベンチへと向かった。

「あの、御坂さん。さっきの人、知り合いですか？」

「……知らない人」

呆然とする、2人の少女を残して。

クレープを食い終えた麻生は、さて、どうしようかと考える。
愛読書の『月刊アイアンマン』は、既に今月号を買ってしまった。
プロテインは、まだまだ余裕があるから買い足す必要もない。
服は……無頓着なので、ほとんど買いに行かない。

家に帰ってストレッチでもするか。

麻生がそう考え、ベンチから立ち上がった直後のことだった。

麻生の左側から、轟音が鳴り響く。

驚いて目を配ると、何やら爆発が起きたようだ。

場所は……男が預金通帳を作った銀行の支店だった。

2度目の爆発音に少々遅れて、真っ黒な煙が銀行から溢れだす。
その煙に紛れ、3人の男たちが駆けだしてきて。

麻生は、それが恐らく犯人であろうと推測した。
というより、その出で立ちからして、犯人見て間違いない。
春先とはいえ、暑そうなジャケットに白い布を口に巻いた集団。
そんな連中なら、特別な事情でもない限りマトモなはずがない。

それを認識すると、麻生は駆け出す。

ガードレールを1回の跳躍で飛び越え……違う。

ガードレールと道路を片足だけで踏み込んだ跳躍で飛び越えた。
そして、道路の反対側の、銀行前の歩行者用の道に着地する。

『な、なんですか？』という声が聞こえたが無視して。

苛立ちを隠さない強い視線で、その3人組を睨みつけた。

「白昼堂々の銀行強盗か」

「なんだ、このキモチ悪い体しべへえっ！」

『キモチ』の辺りで、既に麻生は動いていた。

大股で10歩程度の距離を、あっという間に詰め。

尋常ならざる速度で真ん中にいた太い男に、拳で一撃。

やや上から下に打ち下ろすような軌道のストレートが、強盗の1人
に突き刺さる。

顔を打ち抜かれ、その男は地面を舐めるように後ろ向きに2回転
して。

背骨と首がおかしくなったのか、エビ反りの体勢のまま動かなくな
った。

「腹の脂肪を落としてから出直せ」

じゃあ、腹の脂肪落としたら強盗してもいいんかい。

そんな命知らずなツツコミをする者はいない。

だが、ツツコミなどせずとも、残った2人のうちの1人が麻生を見据える。

本能に訴えかける危険を察知したのか、先ほどよりも距離をとっていた。

左手をゆっくり持ち上げ、手の平を上に向け、意識を高め。

その掌中に、炎を生み出してみせる。

典型的な『バイロキネシスト発火能力者』なのだろう。

しかし、今の状態からでは、そのレベルは分からない。

手の平サイズの炎であれば、レベル2に近いレベル1なら充分に可能だ。

だからといって、その男がレベル2程度であると考えるのは早計である。

レベル3以上の能力者ということも、考慮に入れねばならない。

「今さら後悔しても遅えぞ」

「後悔？ オマエらを叩きのめすことに対してか？」

「ハッ！ 上等じゃねえか！」

パイロキネシストの男のテンションが高まる。

そのテンションを全て左手に預け、炎が勢いを増す。

明らかにレベル3以上なのだが……。

麻生は、笑いも怒りも怯えもせず、仁王立ちしていた。

「テメエには消し炭になつてもらうぜ！」

「ダメ！ お逃げに……」

なんか後ろから声がしたが、麻生は無視。

人間1人……麻生並みの体の持ち主を飲み込むほどの炎。

それだけの規模の炎を、一步も動かず仁王立ちしたまま食らう。

完全に直撃していた。

皮製品の焼ける匂いと、髪の毛の焼ける匂い。

その2つが混ざって、麻生の後ろにいながら無視されていた黒子の鼻に届く。

彼女が初めて嗅ぐ、人が焼け死ぬであろうときの匂い。

その匂いに吐き気を覚える。

覚えるのだが。

白井黒子は、己の目の前の光景を疑った。

立っているのだ。

相応の威力を持った炎をその身に受け、筋肉モリモリの男が立って

いるのだ。

タンクトップが燃え尽き始め、上半身が露わになりつて。たくましい大円筋、広背筋、脊柱起立筋……背中の筋肉たちが顔をのぞかせる。

まるで、細い蛇を束ねて、1つの形にしたかのような筋肉だ。

黒子も思わず、吐き気を我慢できなくなって路地裏にテレポートした。

強盗の男も、麻生を倒し切れていないことに気が付いたのだが。もう、遅かった。

視認できるが反応できない速度。

そんな速度で詰め寄られ、襟首を掴まれ頭突きを1発。

怯んだところにまた頭突き、そして頭突き。

そんな頭突きが10発近く入り、ゴツゴツ鳴っていた直撃音が湿っぽくなってくる。

『グチャッ』とか『ミチャッ』とか、そんな感じの音だ。

麻生が襟首を放してやると、パイロキネシストはそのままうつぶせに倒れた。

地面に顔が当たる際に、やはり水っぽい音が聞こえてくる。

鼻あたりがグズグズになって、こんなヤバそうな音をさせるに違いない。

「ひつ……ひあああああああああ！」

残った1人が、金の入ったバッグを投げ捨て、脇目も振らずに逃げ

出した。

既に2人は確保できているのだから、いずれ残りも捕まるだろう。それに、これは元々アンチスキルやジャッジメントの仕事である。そう思い直し、麻生は残りを無視していたのだが。

小さな男の子が、人質に取られそうになっていた。

そして、中学生くらいの少女がそれを止めようと食い下がっているが、しかし。

『離せよ！』という声とともに、男の蹴りが放たれて。

その少女は、その蹴りをマトモに顔に受けた。

別に、麻生に義理はない。

見覚えのない少女であるし、ココからは彼の領分でもない。ジャッジメントでもアンチスキルでもないのに、これ以上事件を追う必要はない。

だから、麻生は道路に躍り出た。

義理もなく、義務もない。

それは、犯人に対しても同じだ。

見逃してやる義務もなければ、無事に済ませてやる義理もないのだ。

蹴りをくれた男は、そのまま車に乗って逃げようとしていたが。麻生を確認すると、『このまま引き下がれっかよ！』などと言いがら。

無謀にも、彼に向かってアクセルを踏み込んだ。

「バカが」

その言葉が引き金であるかのように。

麻生の筋肉は熱を持ち、一目で分かるほどに膨張する。

辛うじて引っ掛かっていたタンクトップの腹回りが、今で弾け飛ぶ。

せつかく戻ってきた黒子が、残りの胃液を草むらに戻したのは別の話だ。

「あ、あれってまさか」

バスの近くで祈るように手を組んでいた初春。

彼女が驚くのも無理はない。

焼けていた肌は、すでに完全に元に戻っていて。

それどころか、男の体は膨張し、炎がほとばしっている。

パイロキネスト

学園都市にいる発火能力者の中でも、異質の力と性質を持つ者。

通常の発火能力が、分子摩擦や静電気発火の類であるのに対し。

その男の発火能力は、体細胞の高速運動によって生じるのだ。

それによって活性化した筋繊維は、常人には信じられないほど膨張し。

生み出された炎を纏い、その場に君臨する。

数少ない学園都市のレベル4の中で。

今現在、もっともレベル5に近いと言われている能力者。

その能力は『細胞発火^{ヒート・セル}』と名づけられたが。
彼自身は、その能力と己のことを。

「『マッスル・コレクター
筋肉至上』……？」

そう、呼んでいた。

乗用車が物凄い速度で迫りくる中。

麻生は逃げも隠れもせず、むしろ自分から向かって行った。

191cm、124kgの麻生。

どう考えても麻生の5倍以上の重量はある乗用車。

単純にぶつかるだけなら、どちらがどうなるかは明白だ。

だが、麻生は『マッスル・コレクター
筋肉至上』である。

その筋肉は、常の人間の20倍近い出力を発揮し。

筋肉そのものの温度も、タンパク質の限界を遥かに超えた700度
まで上がっている。

それはさながら、灼熱の弾丸。

この瞬間だけは、彼は誰にも止められない。

「おおおおおおお！！！」

車と麻生が接触する寸前まで響いていた雄叫び。それは、どちらの叫び声だったか。

弾け飛んだのは、車の方だった。

下から持ち上げる様なタツクルで、上方に大きく吹き飛ばされる。質量からは考えられないような飛び様だった。

勢いよく跳ねあげられ、空中で数回回転し。

エンジン部分から地面に突っ込んで、中の男ともども動かなくなつた。

「フンッ！」

体に付着したススの残滓を払いながら、麻生は鼻息を1つもらしてうねる筋肉を抑え込んで、その場でクールダウンのストレッチを始めた。

「お手柄だったな、お嬢さん」

「……はあ」

「すごく……カッコよかったぞ………」

「……どうも」

お嬢さん……佐天涙子はよく耐えたものだ。

いや、ちよつと顔が赤いか。

夕日を受けてのことか、別の要因で赤いのが気になるところである。

いくら事件を解決した男とはいえ、マッチョが目の前で手を差し出しているのだ。

すっごいイイ笑顔で。

ところで、麻生に関してだが。

事情聴取に来たはずのアンチスキルもガン無視。

ジャッジメントの2人は、1人は吐いてて、もう1人は固まってて使い物にならない。

黒子の方など、あまりに疲弊していたため、そのままアンチスキルに連れて行かれた。

向こうで介抱してもらおう予定らしい。

「怪我は大丈夫か？」

「はい、なんとか」

とはいふものの、顔は少々腫れている。

蹴りをもらってれば、そうなるのも必然か。

普段から殴ったり殴られたりしているわけではないので、仕方ないことだろう。

と、上半身裸のままの麻生は、大胸筋をピクピクさせながらカバンの中を探る。

カバンから出てきた手に握られているのは、人の頭くらいの大きさの金属製の缶。

タンパク質含有率95%以上のプロテイン。

そのプロテインを、座りこんだ佐天の隣に置いた。

「いいガッツ見せてもらったからな。コイツは餓別だ」

そう言い残し、麻生は上半身裸のまま去って行った。

その後、別の学区に入った途端に捕まったりする麻生だったが。

『これが俺のパーソナルリアリティだ！』と弱腰のアンチスキルに詰め寄り。

あとから来た隊員に勘違いされ、危うく本当に捕まるところだったらしい。

第1話『Only My Protein』（後書き）

一切手直ししておりません。

ご感想に加え、誤字脱字、おかしいところございましたらご指摘いただけるとありがたいです。

第2話『ビルダーの恩返し』

突然だが、麻生は走っていた。

経済的には恵まれている彼だが、食糧問題は切実である。

何が切実かというと、プロテインがすぐに切れるのだ。

体重当たりで必要量が決まっているので、体の重たい彼ではすぐに使いきってしまう。

昨日、勇ましい少女にプロテインを分けたことをすっかり忘れていたのだ。

時刻は午後7時。

彼の住んでいる学区から最短でスポーツショップに行っても、恐らく間に合わない。

トレーニングルーム

こんなことなら、研究所にプロテインを頼んでおくんだった。そんな後悔をする時間さえ勿体ない。

彼が目指しているのは、学区内のスーパーマーケットである。

こんなところには滅多に来ないのだが、プロテインが切れたのだ。いたしかたなく、卵を購入してタンパク質を補おうと思っていたのだ。

閉店前の総菜の割引などに用はない。

彼の想いの全ては、生卵のＬＬ玉に注がれている。

厳密には、タンパク質たっぷりのＬＬ玉の白身に。

少々急ぎ足だが、走るほどでもない。

まだスーパ―の閉店時間まで2時間あるのだ。

タイムサービスでM玉が安くなっている頃だが、麻生には関係ない。彼が欲しいのは、白身の量が最も多いLL玉である。

想えば、麻生が卵の白身を飲まなくなって久しい。

最後に飲んだのは、半年前であつたろうか。

その後、研究員から『プリン体が多いから控える様に』と少しキツめに諭された。

それ以来、プロテインの注文を小まめにするようになったのだが。

偶然とはいえ、手元のプロテインは切れているのだ。

これは生卵で補充するしかないと自分に言い聞かせつつも、本当のところ、久々に摂取する白身の味に心躍らせている。

それが、よくなかった。

いや、何も麻生だけが悪いのではない。

よく前を見ていなかった、ウニ頭の少年も悪いのだ。

男の大腿直筋と、ウニ頭の持ってたビニール袋が直撃した。

集中力を欠いていた麻生と、前を見ていなかったウニ頭。

この2人がすれ違いざまにぶつかったのは、ある意味必然だったのかもしれない。

「あ……あああ………」

叫ぶこともなく、その場に崩れ落ちるウ二頭……上条当麻。

その目は丸く見開かれ、絶望の色に染まっていた。

今や上条家のエンゲル係数は跳ね上がっており、摂取できる栄養も限られている。

タンパク質など、ここ2週間は卵以外でお目にかかっていない。

そして、これから1週間も、タンパク源は卵だけで乗り切らねばならなかった。

それなのに、安易なミスで全てをダメにしてしまった。

ぐちゃぐちゃに潰れた、5パック分のM玉。

中身を盛大にビニール袋にぶちまけながら、見事に全滅していた。

「俺の、タンパク質……」

その言葉を耳にして、麻生は罪悪感に苛まれた。

目の前のウ二頭の買物袋と言葉からして、貧困に窮していることは分かる。

その顔色、その肌つや、その細い腕などからも栄養状態は知れている。

そして今の『俺の、タンパク質……』という言葉から、全てを理解した。

目の前のウ二頭は貧乏である。

しかしながら、涙ぐましく安売りのM玉でタンパク質を摂取している。

その場に崩れ落ちるほど、タンパク質を欲していた。

つまり……プロテインを買う十分な金がないということだ。

だから、そんなつまらない細腕をしている。

トレーニング能力開発の効果が十分に出ていないのも、きっとそのせいだ。

腕の太さ、首周りの甘さからして、筋量は1か2といったところか。

そんな彼のタンパク質を、自分が奪ってしまった。

トレーニング他者の能力開発を妨げるなど、ボデイビルダー能力者として、最低の行為である。
意図的であるかどうかは関係なく、最悪だ。

「すまなかった、少年」

「謝るくらいなら……」

「分かっている。俺には全て分かっている」

いかにタンパク質を欲していたのか。

麻生はそれを、ちゃんと理解している。

だからこそ、しっかりとした形で、お節介も含めた謝礼がしたかった。

「少年。相応の謝罪と詫びの品を送らせてもらいたい。

手間をかけるが、住所と電話番号を教えてくださいだろうか」

「拳句マルチか詐欺ですか。上条さんはそんなに引っ掛かりませんよ?」

「信じる少年。持ち合わせはあるが、充分な謝罪がしたいんだ」

信じてくれ、と念を押す麻生。

その熱視線と、肉体から発せられる説得力。

そこに、上条の生来のお人好しが相まったからか。

それとも、単に麻生の視線と肉体美に耐えられなくなったからか。

「分かった……信じるよ」

なんてカッコつけて、上条は電話番号と住所を教えた。

麻生はそれを携帯電話にしっかりと記録し、何度も頭を下げて立ち去った。

まあ、立ち去ったと言っても、スーパーに……玉を買いに行っただけであるのだが。

そして翌日。

とある安アパートの一室のチャイムが、配達業者に打ち鳴らされた。

「はいはい、どちら様ですか？」

そうやっておざなりに扉を開けると、そこには配達員がいた。

しかも、1人ではなく4人。

4人の配達員が、重たそうに段ボールを抱えて待っていたのだ。そんな4人が、上条であると確認がとれるや否やドカドカと入り込む。

段ボールは全部で6つ、どれもこれも重たそうだった。

「ハンコかサインをお願いしたいんですが……」

などと言われ、なされるがままにサインしたが。送り主の『麻生』に覚えがない。

まさか、記憶を失う前の知り合いなんだろうか。そう思わなくてもないが、昨日のことを思い出す。

やたら筋肉質だった巨体の持ち主。

彼の名前が麻生だったような。

とそんなことを考えているうちに、居候のシスターが。

その段ボールの箱を勝手に開封し、中に入っていた銀色の袋を次々と取り出す。

その袋には『ブルーベリー味』と書いてあったが、ブルーベリー味のなんなのか？

まさか、粉ジュースではないだろう。

あれは、名前が違っただけで同じ味の砂糖水だから。

そもそも、粉ジュースを人間の頭より大きな袋で送ってくる必要はない。

そんな疑問を抱いていた上条だが、シスターが商品名を読み上げる。英国にいたのだから、英語は堪能だ。

その程度の単語を読めないほど、彼女の知識は浅薄でもなかった。

「何だろコレ？ プロテインって……とーま、こんなの買い込んだの！？」

「違う！ これは昨日ぶつかったマッチョマンが送ってきたんだ！」

「ふーん。まあ、私は食べれば何でもいいけど」

居候のシスターは、摂取の仕方を見るなり水をドンブリに注ぎ始める。

で、そのドンブリの中にブルーベリー味のプロテインを入れ、スプ

ーンでかき混ぜる。

本当は先に粉を入れておくといいのだが、シスターの知識の中にそんなものはない。

もし10万3000冊の中にその知識があつたら、教会の存在意義を疑うところだ。

というか、過剰に投与されたプロテインは、ネノレネノレネノレネみたひになつてた。

このシスター、どうやら適量というモノに目を通さなかつたらしい。甘い匂いに期待を膨らませているが、これだけは読者の方々に伝えたい。

こつという風に過剰量のプロテインを摂ると、肝臓壊して死にます。

冗談半分でマネしたり、罰ゲームとかで食わせたりしないでください。

死ななくても、病院で腹搔つ捌かれたりする可能性大です。

プロテインは、飲めば筋肉の付く魔法の薬ではありません。

用法用量を正しく守り、サプリメントとしてお使いください。

で、そんなヤバそうな物体を、シスターは笑顔で口に放り込む。

上条さん？

彼だつたら、今まさに、用法用量を確認しているところです。

もぐもぐと口を動かし、味を確かめるシスター。

よくかき混ぜたものの、やはり粉っぽい。

粉っぽいが、しっかりとブルーベリーの味は付いてて、案外腹も膨れる。

単に腹にモノを入れただけのような気もするが、なんてことはない。

ゲル状のカロリー×イトを食ってると思えば、それほど違和感はないのだから。

「あゝ、インデックスさん？　これ、水に溶かすのが正しいらしいんですけど？」

「え？　ちゃんと水に溶かしたよ？」

どう見ても『水でグチャグチャにした』だけなのだが。その辺りは、シスター的には同じこと。

しかも気に入ったのか、スプーンはなかなか止まらない。久々の甘味に満足しているのか、心なしか笑顔でもあった。

そんな笑顔を見たウニ頭は。

『ああ、別にインデックスが幸せそうだしいいか』と自分を誤魔化す。

誰も犠牲になっていないので、それはそれでいいのかもしれないが。

幻想殺し	(イマジネブレイカー)	：上条当麻
筋肉至上	(マッスルコレクター)	：麻生武彦

この2人の奇妙な運命は、まだ、始まったばかりである。

第2話『ビルダーの恩返し』（後書き）

二重の意味で恩返しじゃないですね。

第3話『Bulk up suppression』(前書き)

あまり添削や推敲を行っていません。

目に余る間違いがあれば、ご指摘いただきたく思います。

第3話『Bulk up suppressment』

3カ月に1度行われる、ジャッジメントの合同演習。

本来なら夏休み突入直後に行われるのだが、それを待たずして前倒しされた。

というのも、凶悪事件の増加に伴って、ジャッジメントの人員の怪我が増えたからである。

必ずしも怠惰が原因ではないが、安全に対する意識の低下から起きた怪我也有る。

例えば、ひつたくり。

担当したのはレベル3の肉体強化……スプリント高速走行の男子生徒。

神経系統の活性化により、主に脚力を高められるという能力。

制限時間つきではあったが、その最高速度は時速70kmにもなる。自転車相手なら、物の数ではないはずだった。

が、問題はココからだった。

事前の情報で、犯人はレベル2の念動力サイコキネシスだったと分かっていたのだ

が。

その数字に騙され、念動力を加えた投石で肋骨を折られた。高速移動の勢いも重なったということもあるが、あまりにも粗末な結果。

犯人こそ根性で確保したが、そのジャッジメントは長期入院を強いられた。

ジャッジメントは、実動部隊の6割近くがレベル2～3の生徒で占められている。

つまり、このような不祥事は、実動部隊のほぼ全員には無関係ではないということだ。

レベル4の生徒も何人かいるにはいるが、その生徒とて常に動けるわけではない。

個人の能力をあげるよりも、組織全体の能力向上を図る。

自治組織としてのジャッジメントの選択とは、つまりはそういうことだった。

「まったく……せつかくの休日が台無しですわ」

「いいじゃないですか。夏休みの合同訓練の前倒しということですし」

「初春。アナタ、少々楽観的に過ぎるのではなくて？」

身長の関係で最前列にいた、白井黒子と初春飾利。

先に対する感想こそ違うものの、2人にとって今日の訓練は望まれ

ぬもの。

黒子は美琴と買い物に行くはずであったし、初春も佐天と遊びに行く予定があった。

日々の疲れを取り除くための休暇に、疲労を重ねる行事を突っ込まれたのだ。

不平不満が口をつくというのも、仕方がないのかもしれない。

「どうせ夏になったら『それはそれ』と言って、同じことするつもりですよ」

もったもな話だ。

集団での訓練と言うのは、いくらやっても足りないくらい。

学生の集まりであるジャッジメントなら、それは尚のことである。

いくらレベルが高かろうが、所詮は20年も生きていない学生の集まりなのだ。

集団での戦法や統率、個ではなく集団としての判断は、当然成人に大きく劣る。

それらを補う意味でも、こういった訓練は非常に有意義である。

それが分かっているのだから、どんな口実でも訓練の回数を増やそうとするのは道理。

黒子の言う通り、夏休みに入る頃の訓練が免除されたわけではないのだろう。

「コラそこ！ 口を慎むじゃん！」

今回の教官と呼ばれた、アンチスキルの女性隊員。

スパルタと特徴的な語尾で有名な、黄泉川と呼ばれる女性である。

常々、その豊満で無駄のないスタイルを妬む黒子であったが、どうせ年増、婚期を逃した女のヒガミと思い、辛い訓練に耐えて来た。

「アンタらの最近の失態は目に余る！」

そういうわけで、今日は特別講師に来てもらってるじゃん！」

どういうわけか、と聞き返す者はいない。

失態が続いたのは事実であるし、それが目に余る件数と言うのも事実。

それに対して言い訳をするほど、彼らは無粋な人間ではない。

が、何も全員が責任感から口を閉ざしていたわけではない。

突如、トレーニングルームから出て来た男に、視線が釘付けになっていたからだ。

初春と黒子も同じで……いや、少しばかり違う。

つい先日見たばかりの男から、視線を離すことができなかった。

黒子よりも遥かに天に近い頭部に、初春の何倍も太い腕。

目に見えるパーツに限ってたが、どれも等しく筋肉に覆われているが、目に見えないパーツも筋肉の鎧を纏っているのは明白だ。

うねるような背中の筋肉たちが暴れ狂う様を、彼女たちは目の当たりにしたことがある。

その経験則からも、太い足が脂肪ではなく筋肉の塊だと直感していた。

何より、彼女には見覚えがあるのだ。

ワックスで髪の毛を整えてこそいるが、その顔つきに。
マッスル・コレクター
筋肉至上を名乗る、レベル4の大能力者の顔に。

「本日、特別講師として招かれました。麻生武彦です」

彼が名乗りを上げてから、ようやく黒子は舌打ちした。

彼女と麻生が共有した出来ごとの中で、彼女は『オエッ』としただけなのだ。

悪態をつきたくなるのも、乙女心として理解して欲しい。

無論、彼女も何もせずに日々を過ごしたわけではない。

マッスル・コレクター
まだ筋肉至上の名を知らなかった彼女は、外見的特徴から麻生を探した。

何も、もう1度会いたかったとかでは断じてない。

もう2度と出会わないように、居住区などを調べておきたいと考えてのことだ。

……隣の区画に住んでいると知って、愕然としたただだったが。

「まず、ジャッジメントの皆さんに最初に言っておきたい」

そんな黒子の感情など意に介さず、麻生は声高々に告げる。

いったい、ジャッジメントに何をモノ申そうというのか？

アンチスキルに並ぶ、学園の自治組織であるジャッジメントに。

目の前に並ぶ50名ほどの隊員を目にしても、麻生に気後れは無い。

すっ、と麻生が息を吸うと、タンクトップの胸元が盛り上がる。

「貴様ら、その程度の筋肉で何か守れると思っっているのか！」

その言葉に共感できたものは、黄泉川を含め1人もいなかった。それもそのはず、ココに集められた50名は全員レベル2以上である。

そして、レベル2といっても、レベル3相当の実力を持った者も多い。

事実上、レベル3以上の人間しか呼ばれていない。

……初春に関しては、人数合わせでコチラの支部に呼ばれたのだが。

そんな連中が、超能力でなく筋肉でモノを語る男に共感できるか？
答えは聞くまでもなく、この不気味な沈黙の中に込められている。

「聞けば、40kg程度のアームカールができないグズばかりらしいじゃないか！」

そんな貧弱で役立たずの連中が、どうやって平和を維持してきたのか不思議でならん！」

その場にいた人間のほとんどは、アームカールが何かさえ分かっていない。

が、とりあえず40kgのダンベルを扱えなければならないと主張しているらしい。

そして、ジャッジメント全体に対して、挑発を仕掛けているらしい。その2点だけは、言葉が通じない中でも何となく理解できた。

なんというか、いきなり不穏な空気が漂っている。

ジャッジメントの面々がピリピリしているのは当然だが。

それ以上に、麻生が危ない感じ。

人を殺しそうな顔をしながら、全員を視界に入れて鬼のような形相をしているのだ。

下手なことを言ったら、有無を言わず殴りかかってくる雰囲気を持っていた。

「今の言葉を不服と思った者は、今すぐ掛かってくるといい。

もしそれで俺に勝てたら、そいつは今日の訓練を免除してやる」

もし戦いを挑んだら、その場で殺してやる。

そんな意思を言葉の端に隠しているかのように、鬼のような表情のままだ。

よく見れば、さっきから無造作に投げ出されている腕の筋肉が脈動している。

どういう意思の下かは分からないが、ヤバそうなのは確かである。

「でしたら」

誰も動かない中で、1人だけ笑みを浮かべる少女がいた。

麻生よりも遥かに小柄で、筋肉など比べるべくもない。

体重差が4倍くらいありそうな、小柄な少女。

小柄だが、レベル4のテレポーターでもある、白井黒子が。

「私が異議申し立てさせていただきますわ」

その言葉を聞いても、ざわめきは起きなかった。

黒子なら妥当……そう考えている人間が多いのである。

麻生がレベル4と知っている人間もいるだろうが、それでも黒子の優位は揺るがない。

黒子本人を含め、ジャッジメントのほとんどの人間が同じ考えに違いない。

「大丈夫なんですか、白井さん？」

「大袈裟ですわね。あんなの、なんてことない筋肉の塊ですよ？」

そう、黒子は麻生のことを調べていた。

ジャッジメントしか閲覧できない情報まで使って。

その中には当然、居住区以外の情報もあった。

麻生武彦。

高校3年生。

レベル4の発火能力者で、レベル2から2年でココまで来た実力者。
パイロキネシスト
発火能力者としては異端であり、体内の細胞の高速運動で発火する。
オート・リパース
レベル2までは肉体再生であったが、後に発火能力者に認定される。

また、黒子は知らないが。
レベル3では風力使いとして登録されていたという、異色の経歴を持つ。
どうやって風力を使っていたかは謎だが……とにかく、今は発火能力者だ。

黒子の認識は、本当に筋肉の塊なのである。

レベル4であろうと、相手は発火能力者。

応用力や利便性、希少性からすれば、黒子のレポートが遥かに上に行く。

威力と言う点では劣るものの、戦いとは攻撃力のみを競うモノではない。

武器の使用が禁じられてるとはいえ、黒子の優位は揺るがない。

黄泉川も、そう考えたに違いない。

生意気だが、黒子には十分な実力があると。

だからこそ、始まってしまった。

パイロキネシスト
テレポーターと念発火の……まな板とマッチョの戦いが。

お互いに構えは無い。

黒子は敢えて構えずに警戒を強め、麻生は黒子を睨むばかり。そんな時間が、既に2分流れていた。

と、1つ強い風が吹く。

黒子の髪の毛が乱れ、スカートの裾を抑えねばならない程度の。その様子を見て、麻生が眉をひそめる。

その瞬間を狙っていたかのように、黒子が駆け出した。

何でもよかったのだ。

僅かにでも麻生に隙ができれば、そこで仕掛けるつもりだった。先手さえ取れば、麻生程度ならどうとでもなる。そう踏んでの行動だった。

10m近かった距離を駆け、あっという間に距離を縮めてしまう。無論、真っ直ぐは進まない。

相手がタツクルの姿勢で待っているのだから、正面から突っ込むのは愚策だ。

麻生の右側に回り込むようにしながら距離を詰め、テレポートを使う機会を伺う。

黒子の移動に合わせて、麻生も黒子を正面に据えようと体を動かすが、既にタツクルの構えを取っているため、黒子の移動に少しばかり遅れた。

麻生の視界の中の黒子が、中心から左の端へと消えそうになる。

そして、実際に黒子は麻生の視界から消えた。

比喻ではなく、突然いなくなるのだ。

相手が知らなければ、いや、あらかじめ知ってたとしても虚を突ける。

しかも、その希少性から戦う機会など滅多にない。

視界から消えて、後頭部付近にテレポート。

そこから、全身のバネを使ったドロップキックで初手を決める。

倒しきれなければ、再びテレポートして追撃をかけるか、針を使って行動不能にする。

白井黒子の必勝系の1つであった。

後頭部の近くにテレポートする理由は2つある。

1つは、相手の視界から消えた際の、相手を掻き乱す効果を高めるため。

もう1つは、黒子自身の腕力不足を補うため。

以上の理由から、黒子はテレポートする場所を決めている。

そんな単純な理由で、テレポート先を決めてしまっていた。相手にも見抜かれる程度の、単純な理由で。

今までと同じように、黒子は麻生の頭部の後ろ側にテレポートする。麻生の視界から消えるか否かといった、絶妙なタイミングで。テレポート間際に畳んでいた体を伸ばし、全力でドロップキックを放つ。

強烈な蹴りが、その体に叩き込まれた。

麻生の強烈な蹴りが、黒子の腹に。

空中で撃墜された黒子は、2度目の演算さえまならない。2m少々の高さとはいえ、受け身も取れずに地面に落ちる。うめき声を上げるだけの余力もなく、立ちあがる力もなく。ただ、口惜しそうに麻生を見上げることしかできなかった。

そんな黒子に、麻生が悠然と歩み寄った。

追撃のためとは思えないほど、ゆっくりと踏みしめるように。

「分かっていると思うが、オマエの敗因は筋力不足だ」

どう見ても読みで負けた。

黒子自身もそう思っているし、周囲もそうだ。

もし別の場所にテレポートしていたら……などということはない。

「その体躯にしては力強いが、所詮その程度。

直接攻撃で俺を倒すだけの力など期待できん。

それを理解しているからこそ、後頭部付近にテレポートしたんだろ？」

そう、テレポートして意味のある場所は限られていた。

合気道の投げ技を使おうにも、麻生にそれだけの隙は無い。

そもそも、パワーやスピードの違い過ぎる相手だ。

いかに少ない力で倒せる合気道とはいえ、容易に決まるものではない。

「だが、パワーのないオマエはそうするしかなかった。

俺ほどの筋力があれば、そんな小細工は必要なかったのだがな」

必然、打撃に頼らざるを得ない。

一撃で麻生を倒せるとすれば、頭部に対する強烈な一撃。

金的と言っ手もあったが、蹴りとはいえ、黒子が男性器に触れられるだろうか？

もっとも、タツクルの姿勢で構えている相手に、金的蹴りは論外である。

体内に何かテレポートしてやるなどということは、状況からして不可能だ。

曲がりなりにも、相手は特別講師という立場で戦っている。

針を持ってない今、何か転移するとすれば、それは小石などに限られる。

そんなものを体内にレポートさせれば、麻生も無事では済まないだろう。

そして、黒子は麻生にそこまでの怪我を負わせるつもりは微塵もない。

歯噛みする黒子に、麻生は手を差し出す。

口にはしないが、もう勝負はついたと宣言したも同然である。差し出された手に重なるように、黒子の手が伸ばされた。

麻生の誤算は、ただ1つ。

白井黒子は、存外負けず嫌いだと考えていなかったことだけだ。

「甘いですわよ、脳ミソ筋肉さん」

その言葉が終わる前に、地上から麻生の姿が消える。

麻生がレポートで飛ばされたのは、上空。

地上20mにも達するほどの、決して安全ではない高さ。

そんな高さに人間を飛ばしたのは、ムキになっていたから。

飛ばしてから、すぐに後悔した。

20mと言えば、4階建てビルの屋上に相当する高さ。

そして、4階建ての屋上と言うのは、飛び降りても楽には死ねない高さ。

助かるかどうか、すぐに施術しても五分五分という高さ。

いくらムキになってたとはいえ、常識で考えればやってはならないことだ。

黒子のしたことは、屋上から人を突き飛ばしたのと同じなのだから。

その場にいた者に聞いたなら、誰もが口を揃えて言ったことだろう。まさか、そんなことになるなんて思っていなかったと。

麻生は、頭から落ちなかった。

人間の比重とは、頭部に集中しているものである。

しかし、麻生の鍛え上げられた体は、胸回りと背中回りが一番重たかった。

すなわち、頭部ではなく肩周りを基点に落下したのだ。

そして何故か、麻生は空中で腕をクロスしている。

両手を開き、背中を軽く丸め。

地面に激突すると同時に、両腕を地面に叩き付けた。

アレだけの高さで、受け身を取ってしまったのだ。

砂煙が上がる中、巨体がのっそりと起き上がる。

驚愕する黒子に、再び歩み寄っていく。

急激な筋肉の膨張に耐えきれなかったタンクトップを、その身に張り付けながら。

落下の際に突き刺さった石の一部は、力を込めたことで既に肉体から飛び出して。

どうしてかは分からないが、肩口から蒸気が溢れ続けていた。

殺される。

黒子は、それ以外の何も考えられなかった。

何せ、彼女の先ほどの攻撃は、充分に相手を殺しかねないものだったのだ。

アレだけの殺気を漲らせていた麻生が、ただで終わらせるはずがない。

そう、思っていたのだが。

麻生の手は、上空にテレポートさせられる前と同じように差しのべられていた。

「甘いのは、デザートと低レベルなプロテインだけで十分だ」

1	1	1
2	1	1
3	1	1
4	1	1
5	1	1
6	1	1
7	1	1
8	1	1
9	1	1
10	1	1
11	1	1
12	1	1
13	1	1
14	1	1
15	1	1
16	1	1
17	1	1
18	1	1
19	1	1
20	1	1
21	1	1
22	1	1
23	1	1
24	1	1
25	1	1
26	1	1
27	1	1
28	1	1
29	1	1
30	1	1
31	1	1
32	1	1
33	1	1
34	1	1
35	1	1
36	1	1
37	1	1
38	1	1
39	1	1
40	1	1
41	1	1
42	1	1
43	1	1
44	1	1
45	1	1
46	1	1
47	1	1
48	1	1
49	1	1
50	1	1
51	1	1
52	1	1
53	1	1
54	1	1
55	1	1
56	1	1
57	1	1
58	1	1
59	1	1
60	1	1
61	1	1
62	1	1
63	1	1
64	1	1
65	1	1
66	1	1
67	1	1
68	1	1
69	1	1
70	1	1
71	1	1
72	1	1
73	1	1
74	1	1
75	1	1
76	1	1
77	1	1
78	1	1
79	1	1
80	1	1
81	1	1
82	1	1
83	1	1
84	1	1
85	1	1
86	1	1
87	1	1
88	1	1
89	1	1
90	1	1
91	1	1
92	1	1
93	1	1
94	1	1
95	1	1
96	1	1
97	1	1
98	1	1
99	1	1
100	1	1

圧倒的な力を見せた麻生に、最後まで食い下がった黒子に。どちらにと言わず、惜し気なく拍手が飛ぶ。

「……負けましたわ」

54

ひとしきりの拍手を浴び、黒子が手を離そうとした。
が、黒子が力を緩めても、その手は全く離れない。
麻生が強く手を握り、黒子が離れることを許さないのだ。

「オマエは俺と特別メニューだ。成長期だし、今から鍛えれば充分に伸びるぞ」

爽やかな笑みを浮かべながら、黒子の手を握り直す。

それだけで、気を張って保たれていた黒子の意識は刈り飛ばされ。
そして、なんの抵抗をすることもなく、麻生の肩にダラリと掛けられて。

何も言わず、そのまま元いたトレーニングルームに麻生は帰っていた。

……もちろん、黒子は返さずに。

「絶対能力者進化計画だア？」

自宅のPCに突如送られてきた、研究所からの新たな計画。そのタイトルと内容からして、メールで済まされるものではないのだが。

送信先を確認するに、それは冗談ではなさそうだった。

2万と1000の量産能力者を、その手で殺害する。

簡単に言ってしまうえば、それだけの計画。

己の半生を考えれば、その程度と言ってしまうていいくらいのもだ。

無論、抵抗がないわけではない。

ないわけではないが、それが計画を断る理由にもならない。

彼からすれば、それだけのことである。

御丁寧に、相手の能力についても記されていた。

そのうちの2万体制システム……妹達は、学園第3位のクローンであるということ。

そして、残り1000体制……弟達ブラザーズは、風力使いと肉体再生であるということ。

これらの全てを殺しつくすことで、レベル6への道が開かれる。

そうであるなら、彼に断る理由は無かった。

「……やってやるオじゃねエか」

小さく、しかし力強く。

口の中だけで回る言葉は、外に漏れることなく。
彼の決心は、強く強く凝り固まっていく。

第3話『Bulk up 〜supriment〜』（後書き）

妹達と弟達。

彼らに襲いかかるのは、学園最強のレベル5：一方通行。
果たして、彼女たちは生きながらえることができるのか？

…… 久々すぎる更新です。

お気に入りしてくれてる方、申し訳ありませんでした。

弟達…… 分かりすぎますね、ハイ。

誰のクローンかくらいは、見当がついてしまうと思います。

あんなのが1000人追加されたと思っていただけだと幸いです。

…… 学園都市が、何か別の街に変わってしまいそうですが。

ご意見、ご感想、ご指摘など、広く承っております。

第4話『彼らの都市伝説』

学園都市の……どの学区だろうか？

それを察することもできないような、平凡な路地裏。
その薄暗い路地裏で、凄惨なリンチが行われていた。

1人の細い男を、両側から屈強な2人の男が抱えている。

そして、その男の腹に、先の2人と同じような顔つきの男がボディ
ブローを決める。

いったい何度腹を打たれたのか、黒いシャツには胃の中のものごと
びりついていて。

真っ暗な地面には、その倍以上の量がブチまけられていた。

それを見つめているのは、無機質な表情を張り付けた少女のみ。

腹を殴り続ける男に守られているかのような場所に立っている。

事実、この少女は守られていたのだが……些細な話かもしれない。

もし、殴られている男の名前と地位を知ったなら。

それを行っているのが誰であれ、目撃者は驚くに違いない。

殴られている人間こそ、学園都市第1位に認定されている超能力者：
一方通行なのだ。

その第1位を、集団リンチの要領とはいえ圧倒している。

学園都市に住む者ならば、頭を抱えてしまうような光景である。

「これ以上の暴行は対象の死亡に繋がります。

と、ミサカは腹パンを続けるA - 12に進言します」

幼いながらに、見目麗しいと言える容姿をした少女が告げた。

常盤台の制服を身にまとっているが、それがまた違和感を生む。

既に月が地を照りつけ、星空を仰ぎみることができる時間なのに。

そんな時間に、どことも知れぬ路地裏に、常盤台の生徒がいるはずもないのだから。

「モヤシに世間の厳しさを教えているだけだ。

と、アソウはM - 602に毅然とした態度で返答する」

それに答えたのは、ボディブローを執拗にしていたタンクトップだった。

ゲルマニウム入りのネックレスを付けている以外に、これといって特徴は無い。

普通よりも鍛えられた体をしてはいるが、せいぜいがソフトマッチョレベルである。

ボディビルダー並に完成された肉体は、残念なことに備わっていないかった。

「アソウもA - 12と同じ考えをしている。

と、アソウはM - 602の言葉に反論する」

「殺された仲間に対しての弔いにもなる。

と、アソウはA - 12とA - 15に賛同する」

その男の言葉に続いたのは、同じような容姿をした男たち。

同じような、というよりは酷似していると言った方が正確だろうか？
全く同じ黒のタンクトップに、全く同じゲルマニウム入りのネットス。
カーゴパンツや軍用ブーツなどの服装も、寸分たがわず同じだった。
違うところと言えば、その身体の厚みが僅かに違ってくるくらいなものである。

そして、外見・性別は必ずしも一致しないが。
一目見てそれと分かるような共通項が、その4人には存在した。

「時間が掛かり過ぎたので撤退を推奨します。

と、ミサカは呆れ半分・嬉しさ半分に訴えかけます」

「M - 602 がそこまでいうなら撤退する。

と、アソウは僅かばかりの下心から提案を受け入れる」

「確かに作戦決行時間をオーバーしている。

と、アソウは下心を持っていたA - 12に引きながら賛同する」

「そもそもM - 602の発言のどこに下心をくすぐられたのか理解できない。

と、アソウがA - 12の脳の仕組みについて心配しながらコイツを開放する」

どのような感情を口にしようが、誰もが無表情。
瞳にはどのような色もなく、声色さえも平坦そのもの。

その立ち振る舞いを以ってしても、機械的な印象しか受けない。彼らと彼女から、感情を読み取ることなどではしなかった。

言葉通り、すぐに一方通行は解放された。

とは言っても、2人の男に両腕を放され、地面に倒れ伏しただけのことだ。

それを見て、彼の左腕を掴んでいた男…… A - 15が、ポケットの無線に手を伸ばす。

彼は義務を果たすために無線の電源を入れ、前回・前々回と同じような内容を口にした。

「シスターズ プラザーズ 妹達・弟達混合部隊、一方通行を戦闘不能にしました。

負傷者1名、A - 14が一方通行の能力により…… 右の手首をねん挫した模様です」

もはや、それは研究者たちにとっても驚くべきことではない。

今回で308回目となる『実験』だが、一方通行の敗北が4割を占めている。

敵を倒し切れなかったことを敗北とするなら、その敗北は7割に届くだろう。

だから、今回の一方通行敗北の連絡にも、冷静に対処することができたに違いない。

無論、疑問を呈する研究者は何人もいた。

学園都市第1位の實力の持ち主が敗北すること、それを続けること。そのどちらに対しても、当初は反対意見が多かった。

だが、これはツリー・ダイアグラムが導き出した結果だ。

一介の研究者ごときが口を挟み、導き出されたモノとは違う実験を行って。

そして、この実験そのものが失敗してしまったら、その責任は命くらいでは済まない。

実験の対象がレベル5の一方通行であるから、という理由も少なからず影響しているが。

とにもかくにも、これが敗北を含めた実験であると納得するしかなかった。

去り際に、A - 15と呼ばれた男が一方通行に向かって唾を吐いたが。

その顔にも、やはり表情などは浮かんでいない。

人形のようなその顔を視界に収めながら、一方通行は喉から声を絞り出す。

「な、んで……」

ベクトル操作が、通用しないのか。

その言葉を全て口にする間もなく、一方通行の意識は闇に落ちた。

都市伝説、というものがある。

まあ、他愛のないものなのだが、要するに『一般に流布している怪奇話』のことだ。

もちろん、その括りに入らないものもあるが、この場ではそう定義して差し支えない。

これから話されるのは、ここ学園都市のみで広まっている話なのだから。

レベル・アップ
幻想御手、脱ぎ女、どんな能力も効かない男。

変人201面相、トワイライト喫茶店、軍用クローン人間。

そういった奇異な話が、年頃の学生の間で話題にならないはずがない。

彼ら・彼女らにとって、信憑性や整合性などは二の次である。

『いかに興味を惹くか』『いかに斬新か』『いかに独特か』

むしろ、ある種の流行ともいえる性質にこそ、皆は執着する。

そして、この4人も例外になることなく、歳相応の感性をしていた。

第七学区の喫茶店『カーフ・レイズ』の一角。

外の景色がよく見えるボックス席に、制服姿の彼女たちがいた。

「白井さんは、この中ならどれが気になります？」

頭に花飾りを付けた少女、初春飾利。

彼女のノートパソコンには『学園都市伝説』というサイトが覗いている。

その名の通り、学園都市の中でのみ語られる都市伝説を集めたものだろう。

例によって例のごとく、信憑性も整合性もなく、情報源すら怪しいものである。

そんなノートパソコンの画面を皆に見えるように向け、彼女は微笑んだ。

「興味ありませんわ。そのようなくだらない噂話は」

呆れた表情を見せるツインテールの少女は、白井黒子。

ジャッジメントの一員なのだが、本日は非番なのか喫茶店で息抜きしている。

常盤台の夏服を着ており、その風評の1つに違わずマセた視線を画

面に寄こす。

先々週よりも引き締まった体をしているが、それについて何か言う者もない。

もともと貧相だった彼女の体が引き締まったところで、誰も注目などしていないのだが。

「えー？ 私はこの『レベル・アップ幻想御手』とか気になるけどなあ」

興味しんしんと言った様子の、佐天涙子。

レベル0の彼女にとっては、幻想御手は気になる噂に違いない。心底信じているわけではないが、あったらいいなあ、とは思っている。

そんなことを思いながらも、夕飯はどうしようかという考えが頭の片隅にある。

自炊している彼女からすれば、噂話よりも大切なことに違いない。

4人目の少女、美坂美琴だけは口を開かなかった。

ノートパソコンの画面のある一点を、じっと見つめているだけだ。

『何を見ているのか』というのを聞こうとした初春だが。

彼女の視線を追っていくうちに、その項目を自分で見つけてしまった。

『どんな能力も効かない男』という、とりわけ眉唾な噂話である。その下にある『筋トレでレベル向上！？』については、彼女は見なかったことにした。

「あら？ お姉さまの食指が動くものでもありませんか？」

「……なんでもないわよ」

どうやら、黒子の位置からでは何を見ているかまでは分からなかったらしい。

ただ、御坂がいずれかの記事に気を取られていたということは分かったようだが。

無論、このまま引き下がる白井黒子ではない。

少しばかり食い下がるべく、そのためのセリフを考える。

が、彼女の思考を遮るようにして、初春が先に口を開いた。

とはいっても、背中を丸めて、視線を気にするように巡らせながら。国家機密の類でも扱っているかのような神妙さで、ポツリと告げた。

「あそこにいるの、麻生さんじゃないですね？」

小山のような肉体の持ち主が、初春の指差した先に座っていた。

スプーン片手に、ジャンボチョコレートパフェを平らげている最中である。

氷の入っていないアイスミルクを4つ並べているが、それには手を付けてないない。

たった1人でボックス席に座っていることもあり、必要以上に目立っていた。

「でも……麻生さんがバスに乗って別の学区に行くの、さっき見た

じゃん」

「えっと、麻生さんでしたら、お姉さまと私もコチラに来る途中で見掛けてますわ」

「さすがに見間違えないわよね、ああいう体してると」

三者三様に口にするが、お互いの言葉に疑問を覚えざるを得ない。この4人が喫茶店に集まる時、別々のルートから来ているのだ。別々とはいっても、佐天と初春、御坂と黒子の2組で分かれていただけだ。

この喫茶店に来るためには、常盤台と柵川中学は逆方向から来る必要がある。

そして、2組がほぼ同時に喫茶店に入ってきたことを考えれば……。どちらかが見間違えていない限り、このようなことになるはずがない。

だがしかし、見間違えるだろうか？

身長は190cm近くで、体重も130kgに届かんとしている。しかも、その肉体は脂質ではなく、文字通りの筋肉の鎧で覆われている。

そんな人間が、学園都市にゴロゴロしているというのは考え辛い。もしかしたらいるのかもしれないが、少なくとも彼女たちに覚えは無い。

「あ、もしかしてコレだったりして」

佐天が、今度はPCの画面に指を突きつける。

そこには『軍用クローン人間』と書かれた項目があった。

もちろん、佐天も本気ではない。

面白半分に言ってみただけなのだが……想像してしまう。

麻生ほどの人間がクローンで量産され、街を闊歩している姿を。

全ての麻生はタンクトップ姿で、ダンベル片手に街を歩いている。

中には、大リーグ養成ギブスのような器具を付けた麻生もいた。

そんな麻生達で街が溢れかえっている中、彼女たち4人だけが例外だ。

どの麻生も何もしてはこないが、堅強に過ぎる肉体が押し寄せてくる。

当然、錯覚どころか妄想にすぎないのだが、それだけで彼女らは食欲をなくしてしまった。

「まあ、この話はココまでにいたしましょう」

ポンポンと手を打って、黒子が話を中断する。

まあ、彼女がそうしなかったところで、この話題が続くとは思えなかったが。

トレーニングルームに引きずり込まれた身としては、早々に頭から追い出したいのだろう。

「そんなことより、佐天さんの耳にもお入れしたい話がありまして」

「え？ 私に？」

黒子が佐天に……というのは珍しい。

趣味嗜好が違うのもそうだが、共通の話題がないのだ。

佐天はバラエティ番組などをよく見て、噂話の類を好む。

黒子はというと、話題の中心はハイティーン向けの小説が主である。そういうことを互いに知っていることもあり、滅多に2人で話さない。

そんな黒子が、佐天の耳に入れておきたい話があるという。

「ええ。お姉さまと初春は知っているのですが……」

黒子は、警戒するように周囲を見回す。

聞かれたら不味い内容なのか、拳動不審なほどに視線を巡らしている。

その姿は、まるで先ほどの初春をまねているかのようだった。

それほどの注意を払った後に、声をひそめて佐天に告げた。

「最近、能力者による爆破事件が立て続いておりますの」

それを聞いて、佐天は首をかしげた。

わりとマメな性格なため、そこそこニュースにも目を通している。なのに、ここ数日で爆破事件の話題など、一度も耳にしていない。

「爆破事件ですか？ そんな派手な事件なのに、犯人が分からない」

そこまで言うてから、ハツとしたような顔をする佐天。

これではまるで、ジャッジメントの能力に疑問を抱いているようだ。世間話としては差し支えないが、白井黒子はジャッジメントである。

気マズさを感じながら視線を合わせたところ、黒子は澄ました顔をしていた。

佐天の言葉など気にもかけていないかのように、楚々としたようすで紅茶を口にする。

一口だけ飲んだ紅茶で口を湿らせ、何事もなかったかのように再び口を開いた。

「それが、わからないんですの」

「わからないって、何がです？」

神妙な面持ちをして告げられたところで、佐天には察しようがない。そんなことは黒子も分かっているはずだが、少々疲れているのかもしれない。

連日の事件の処理に、薄い紙を重ね続けるような地味な日々のトレーニング。

そういった日常が疲労を押し付け、今のよう判断力を鈍らせているのだろう。

「それだけの事件を起こせる能力者が、学園都市のデータベースに載っていませんの」

「えっと、厳密にはいるんですけど、全員にアリバイがあったんです」

黒子の足りない言葉を、すかさず初春が補う。

そのサポートは的確であり、お陰で佐天は1つ質問をせずに済んだ。

だが、それとは別に疑問は残る。

事件を起こせるような能力者はいなかったということだが。

それは、あくまでもデータベース上での話である。

もし、データベース上の能力のレベルが、現在のレベルと一致しなければ。

そんなことを思っただけで口を突いたのが、

「急にレベルが上がったっていうのはどうですか？」

という言葉だった。

彼女なりに、無い知恵を絞った結果である。

そうであるのだが、あまりにも鋭い切り捨てで返されてしまった。

「それこそ『幻想御手』でも無いと不可能ですわ」

「面白そうな話だな」

突然、声が降ってきた。

後ろや横ではなく、上から降ってきた。

その声は、不思議な重みを伴っていて。

4人の誰にも聞き覚えのある、力強い声だった。

タンクトップを押し上げる大胸筋、伸びていてもなお堅強な上腕三頭筋。

ガラス製のコップを掴んでいる手の甲は、ハッキリと血管が浮き出ている。

そして、ココアのような色をした液体で、そのコップの中は満たされていた。

彼の……麻生武彦ことだから、ココア風味のプロテインに違いない。

「白井、よかつたら俺にも聞かせてくれないか？」

さまざまな理由から動きを止めた女子学生に、麻生は言葉を放った。鍛え込まれた肉体に視線が釘付けになり、視線を逸らせないでいる。

だから、気付かなかった。

その麻生の後ろを、麻生にそっくりな男が通過しても。

御坂美琴と瓜二つの容姿の、ゴーグルを首に掛ける少女に。

その5人の誰ひとりとして、気付くことはなかった。

第4話『彼らの都市伝説』（後書き）

えー、大変長らくお待たせしたにもかかわらず、筋肉分が少なめで申し訳ない限りです。

色々と試行錯誤した結果、のちの話の伏線を集めたみたいになってしまいました。

今後は、アニメ版の超電磁砲のストーリーを基軸にして物語を書き進めていく予定です。

また、時系列が少々狂ってしまっているかもしれませんが、ご容赦いただきたく思います。

第5話『Level Upper』

佐天涙子、柵川中学校1年。

レベル0……折り紙つきの無能力者。

前向きで行動力があるが、それだけの凡人だ。

唐突だが、彼女はコンプレックスの塊である。

その性格や立ち振る舞いは、普通の女子中学生としては及第点以上のモノがある。

クラス1の人気者とまではいかないが、賑やかなグループの一員にはなれるだろう。

明るく、物怖じせず、ポジティブで、流行に詳しく、少し流されやすい。

長所も短所もひっくるめて、魅力的な女性であることも事実だ。

そんな彼女の不幸は、ここが学園都市であるという1点に尽きる。

もし彼女が、普通の中学生をしていたなら。

人並みの悩みを抱え、人並みの努力をし、人並みの幸せを手に入れ

られたに違いない。

しかし、ここは学園都市で、世の常識からはかけ離れた世界。普通などという枕詞は、無能力者の彼女にも無縁なものだ。

たとえば彼女が、能力的には一般人と変わらない人間だったとしても。

そう、彼女は何の能力も持っていない。

『空力使い（エアロハンド）』と認定されているが、そのレベルは0。

小石1つ動かすことさえ困難な、そういうレベルの能力。

何もないのと全く同じの、力ともいえない力。

彼女の周囲に強力な能力者がいたのも、彼女の不幸の1つだろう。レベル4が2人に、学園第3位のレベル5が1人。

佐天涙子からしたら、文字通り雲の上にいるような能力者たち。

その能力者たちが、彼女のコンプレックスを刺激して止まないのだ。

乗用車を易々と横転させる、麻生武彦も。

3次元空間を自由に飛び回る、白井黒子も。

規格外の出力の電撃を操る、御坂美琴も。

誰もが誰も、常識という枠組みを超えた能力の持ち主である。

恐怖と敗北感と……何よりも、羨望を感じずにはいられないほどの能力の。

もちろん、彼女らはレベルの低い人間を卑下したりはしていない。

特に、御坂と麻生の2人は、レベル1から這い上がってきた過去が

ある。

レベルで区別されることの苦しさは、よく理解しているのである。麻生はともかく、少なくとも御坂美琴がレベルで人を区別するといふことはない。

佐天も、自分が意識しているレベルではコンプレックスを感じていない。

だが、もっと心の奥底……深層心理とでも呼ぶべき部分がそうさせている。

どうしよもないくらいの、細胞レベルで刻み込まれた劣等感という感情。

それが、佐天に次元の違いを理解させ、無謀な望みを抱かないようにしていただけだ。

彼女の生活から能力への憧れが薄まっただけで、それ以上の弊害は何もなかった。

それが、覆った。

才能も努力も飛び越える、魅力的過ぎる裏技。

能力開発にケンカを売るような、真正面からの不正行為。

都市伝説の世界から飛び出してきた、奇跡の方法。

幸か不幸か、それを手に入れてしまった。

ただのウワサどころか、都市伝説の1つでしかなかった代物。
『レベルアップ幻想御手』を、彼女は手に入れてしまった。

「……レベルアップバー幻想御手、ね」

手の平に収まるサイズの音楽端末を見つめて、佐天は小さくつぶやいた。

最初は半信半疑だった。
いや、今でも半信半疑である。

作詞者不明、作曲者不明。

タイトルは『Level Upper』といった、出来過ぎた音楽ファイル。

偶然発見したそれを、彼女は即座にダウンロードした。

もちろん、彼女だって本物とは思っていない。

そんなに都合よくレベルが上がれば、もう学園都市で広まっているはずだからだ。

それくらいのこととは理解できていたが、しかし、彼女に無視という

選択肢はなかった。

もしも、これが本物であつたなら。

レベル5とは言わずとも、今よりも能力が向上するのなら。

レベル0の無能力者という烙印を、上書きできるのであれば。

能力を持つ者への羨望が、レベルアップを彼女の手元に残す原因となった。

[illegible]

彼女は今、学園都市の一角で休日を満喫している。

噴水の縁に腰かけ、夏の日差しに抗うように涼を堪能している。

ソフトクリームを平らげたばかりなので、口の中もひんやりとして
いるに違いない。

もちろん休日なのだから、彼女も普段の制服姿ではない。

英語のロゴが入った水色のＴシャツに、膝までのジーンズというラフな格好だ。

足元も簡素なもので、シンプルなミュールにパステルカラーのアンクルだけ。

よく見れば薄くマニキュアが塗られているが、気付くかどうかとい

う程度のモノ。

女子中学生の範疇を超えない、ギリギリの範囲のオシャレをしてるらしい。

スカートよりもパンツルックを選ぶのは、自分のキャラクターを理解しているからだろう。

ジャッジメントの急用で消えた初春のせいで、1人で過ごすことになったが。

ウィンドウショッピングをして、立ち読みして、露天商を冷やかして。

やたらと伸びるトルコアイスを胃袋に収め、噴水のそばで涼み。

1人の時間を、それなりに楽しく過ごしていた。

……過ごしていたが、頭の片隅からレベルアップが消えない。

どこで何をしていても、常に頭の中に引っ掛かる。

それほどまでに、彼女は悩んでいた。

レベル3だった銀行強盗の犯人に、レベル2の落書き魔。

いずれも、彼ら彼女らのレベルでは引き起こせない事件だったという。

レベルアップでも使わなければ、ありえない事件だったという。

その事件の1つに関わった彼女にとっては、なんとなく得心できる話だった。

まさにレベルアップの存在を証明するものだ、得心することができた。

納得できたのなら、すぐにレベルアップを使いたくなるはず。しかし、件の武器を手に入れて1週間が経つのに、彼女は使用をためらっていた。

彼女がレベルアップの使用をためらうのは、悪いウワサのせいだ。今までは無視していた都合の悪いウワサが、現実味を帯びてきた。現実味を帯びて、無視できなくなって、彼女の手を止めていた。

例えば、こんなウワサがある。

レベルアップを使用するというのは、脳を限界以上に酷使するのと同じこと。

もちろん、短時間の能力行使や、比較的簡単な演算であれば問題ない。

しかし、能力を長時間使用したり、複雑で困難な演算を行ってしまったら。

たちまちのうちに脳が壊死を始めて、1日も持たずに死んでしまう。万が一助かって、脳と精神に障害を負って廃人になってしまう。

こんな話を知っているからこそ、佐天涙子はレベルアップを使えない。

能力は欲しかったが、命と天秤にかけることなど考えもしなかったのだ。

リスクの大きさと比べて、手に入る物が小さ過ぎる。

だから、彼女はレベルアップを遣えない。

なら、レベルアップを廃棄すればいいが、それもできない。

悪いウワサが本当にウワサでしかなかったとすれば、彼女は損をしたことになる。

既に諦めていたにせよ、レベルを向上させる手段を手に行っていたのに。

そんな後悔をしたくないから、レベルアップを捨てられない。

「おい、佐天」

音楽端末を握りしめる彼女の頭上から、声が降り注いだ。

ふと気付けば、彼女の眼前に大きな人影が立ちはだかっている。

これだけインパクトのある人物を、彼女が忘れるはずもない。

何となく相手を予想しながら顔を上げれば、想像通りの男がいた。

「難しい顔をしてどうした？」

麻生武彦は、自分より遥かに小さな少女に告げた。

服装はいつもの如く、黒いタンクトップにジーンズという軽装だ。言うまでもなく、タンクトップから覗く腕は筋肉に覆われている。小山のような首の筋肉も、彼が麻生だと特定できる要素につながるだろう。

そんな麻生がソフトクリームを持っている姿は、少々滑稽だった。

「いえ、なんでもないですから」

麻生の顔を見てから、溜め息をつくようにして下を向く佐天。
彼女の悩みを話そうにも、彼は不適切な相手だ。

普段から顔を合わせることがないという点はイイが、大事なところで食い違う。

彼女が相談をしたいのは、レベル4などという高位の能力者ではない。

そんな人間に悩みを話しても、きっと理解されないだろうと、そう考えているのだ。

超人の典型ともいえる麻生が相手では、その思いは強まるばかりである。

「そうか？ 『悩んでいます』と顔に書いてあるぞ」

しかし、麻生も食い下がる。

佐天の表情に……より正確に記すなら『表情筋に』ということになるが。

ともかく、普通ではない何かを感じ取ったからこそ声をかけたようだ。

「どうだ。俺に言いにくいことでなければ相談に乗るが……」

口をつぐむ佐天に、麻生は優しく諭す。

暗に『話しくければ話さなくて良い』とも伝えていた。

相手の年齢や性別、置かれている状況を考えることだろう。

彼は、佐天が大した能力を持っていないと知っている。それなりの能力を持っていたなら、麻生が能力を見る機会があったのだ。

それは、彼と彼女が巻き込まれた、白昼堂々の銀行強盗。佐天涙子は、強盗を逃がすまいと奮闘した。

どのような能力でも、戦いに応用できないことはない。

テレパスで仲間と連携をとったり、相手の心を読んで先手を取る。透視で衣服を透かして、相手の肉体の動きから次の攻撃を予測する。弱い念動力でも、自分の動きの補助をするだけなら充分過ぎる。それ以外の能力でも、使い方次第でいくらでも武器になる。

しかし、佐天涙子はそうしなかった。

ただ強盗を逃がすまいとして、怪我を負っただけ。

その事実が、彼女の能力の低さを物語っていて。

そして、麻生武彦は、それに気付かないほど鈍感でもなかった。

麻生の言葉の後に、しばし沈黙が流れる。

視線を逸らしてしまった佐天からは、同意も拒絶もない。

であるなら、麻生は悪態をついて立ち去ってしまったても良いのだが。そんな彼女の様子に不快感を感じることもなく、ただ、待っていた。ソフトクリームが溶けて手を汚すほどの時間が経っても、待っていた。

「あの、麻生さん」

それだけの時間を経て、彼女は決心をする。

いや、決心というほどのものでもなかったのかもしれない。誰でもいいから話してしまえば、きっとスツキリする。

諦念とも打算的とも思える結論が、彼女に口を開かせた。

「レベルアップって、知ってます？」

半ば流され気味に、ダメもとで発した一言。

その一言が、彼女の運命を変えるキツカケとなった。

それを聞いた麻生の答えは、極めて簡潔なもの。
彼女が悩み抜いた問題への答えは、たったの一言だった。

しかし、この答えに佐天は納得してもいた。

レベルアップの危険性は、明らかに得られるものよりも大きい。
もとより命と引き換えに手に入れる能力になど、どれほどの意味もないのに。

答えを得たというよりは、それを自覚させられたと言った方が適切か。

既に彼女の中にあつた答えを、麻生が選んでやっただけのことだ。

「レベルアップだが、俺には心当たりがある。

廃人とまではいかないにしても、被害を受けた者がいるのは恐らく事実だ」

その言葉を聞いて、佐天は唾を飲み込む。

麻生の様子からするに、レベルアップは本物。

そして、ウワサになつてる脳の壊死や廃人の話も事実の可能性が高い。

もしレベルアップを使っていたらと思うと、怖気が背中を駆け抜けた。

「安易に筋量^{レベル}を上げれば、負担を掛けるのは必然だからな」

「そうですね……簡単に強度^{レベル}が上がったら、苦労しませんよね」

大事な所が食い違っていたが、会話は成立している。
伝えたいことが何となく伝わっているのは、ただの偶然だろう。

「分かってるじゃないか。地道なトレーニング以外に筋量レベルを上げる方法などない」

「……ですよねー」

はあ、と佐天はタメ息を1つ。

こんなことで盛り上がっていたのかと、自分に呆れていた。
何の代償もなしに能力が向上するなどということ自体、話が出来過ぎていたというのに。

音楽端末を見つめながら、彼女はイロイロな思いを巡らす。
超能力者になることを夢見た、幼いころの無邪気な記憶。
初めての検査で、無能力者であると告げられた時の絶望。

どんなに頑張っても能力が向上しなかったときの、苦しいほどの歯がゆさ。

「貸してみる。俺が試す」

そう言うなり、麻生は素早くイヤホンを取り換え、自分の耳に突っ込んで。

『Level Up per』を選択して、佐天が止める間もなく再生した。

驚きで口が開いたままの佐天を尻目に、麻生はイヤホンから漏れる

音を聞き続ける。

が、20秒を過ぎたあたりで顔をしかめ始め、1分ほどで停止してしまった。

不愉快な思いが顔に現れるのを隠しもせず、舌打ちまで付けてくれる。

どうやら、例の『Level Upper』が心底気に食わなかったらしい。

プレイヤーを渡された佐天が、自分が怒られていると勘違いするほどの態度だ。

「ただの連続的な雑音だな。こんなもので筋量^{レベル}は向上しない」

BGMにすらならん、と小さく呟くオマケ付きだった。

佐天はというと、ただ驚くばかりである。

危険と推察したレベルアップを、平然と使用する行動力に。

しかも、彼女が使用を断念した直後に、いきなりだ。

どういう意図で行動を起こしているのか、彼女も理解しかねるだろう。

しかし、それが麻生武彦という人物の個性なのだ。

そう遠くない内に、そういう割り切りが必要なだと彼女は知ることになる。

結局、佐天はイロイロと話を聞いて。

最後に『筋トレをしろ、筋トレ』と麻生にアドバイスをされ。
苦笑いしながら話を聞き流し、適当なところで切り上げさせて家に
帰ってしまった。

ダメもとで筋トレをした佐天のレベルが上がったというのは、もっ
と後の話である。

麻生が佐天に『筋トレをしろ、筋トレ』とアドバイスをして、その
まま別れた翌日。

ついに、10件目となる虚空^{グラビテーション}爆破事件が起きた。

その少年も、コンプレックスの塊だった。

毎日のように金をせびられ、卑屈になるだけだった。

いつもジャッジメントが間に合わず、悔しい思いをするだけだった。そして、佐天涙子と同じように、レベルアッパーを手に入れて、

それを使うのを止めてくれる者は、彼の周りにいなかった。

それは、雑音のようで雑音ではない。

規則性のある音階で、可聴域を超えた音も含まれている。

特定の周期を持っているようだが、重要なのはそこではない。

その雑音が脳を刺激して、AIM拡散場を強固にしているからこそが重要なのだ。

彼、介旅初矢も、レベルアッパーの危険性を知っていた。

佐天と違ったのは、彼はリスクを恐れていなかったということだ。

このまま惨めな思いをするなら、命を失っても構わない。

復讐を果たせるのであれば、という思いが、彼を突き動かしていた。

彼は、自分のレベルの低さを実感していた。
シンクロトロン

量子変速という変則的な能力であったのも、彼の不幸だろう。

本来なら複数の金属で可能な重力子の加速を、身近なアルミを基点にせねば行えない。

しかも、その威力たるや、風船が破裂したのと大して変わらない程度だった。

直接殴り付けた方が遥かにマシだと、随分前に実感していたものである。

だから、彼は慎重だった。

強度が向上しても、すぐに復讐^{レベル}を実行には移さない。

自分の能力がどう変質したのかを、実践を繰り返して確認してきた。

最初は、レベルアップ使用前と大差のない威力だった。

通行人が驚く程度で、被害らしい被害もなかったが。

だが、実践を重ねる度に、段々と威力は向上していった。

レベル3のサイコキネシスで咄嗟に防御しても、重傷を負わせられるほどに。

彼の復讐対象とは、彼から金をせびった連中ではない。

彼がピンチだったときに駆けつけてくれなかった、ジャッジメントを恨んでいるのだ。

もちろん、彼が憂き目を見る原因を作ったのは、ジャッジメントではない。

しかし、風紀を維持するはずの組織が、彼を助けてくれなかったことも事実。

その事実には憤慨していたからこそ、屈折した怒りを懷に抱えていた。

次の目標は、セブンスミスト。

より多くの人間を巻き込んで、より多くのジャッジメントを集められる場所。

彼は、アルミを仕込んだぬいぐるみを片手に、彼は明日を想像して笑った。

狂ったように、ひたすらに笑った。

第5話『Level Upper』（後書き）

お久しぶりです。

いくら亀更新とはいえ、お待たせして申し訳ありませんでした。

弟達、妹達の話は一旦置きつつ、グラビトン事件へと話を移します。
レベルアップ……うむ、イロイロ案があったのに、上手に扱えていないような。

『筋力増強』とかやろうと思ってたんですが、上手く話に混ぜることができませんでした。

力不足を痛感するばかりです。

時系列むちゃくちゃだと思いますが、どうかご勘弁を orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9955m/>

とあるアミノの筋肉至上

2011年7月1日22時38分発行